

本君の話聞く。私の兄もいたところで懐かしく紹介しました。

(福井県 佐々木 清左夫)

臨時召集抑留の記

福井県 白崎 峯 男

昭和十五(一九四〇)年、徴兵検査第二乙合格、第一補充兵となりました。昭和十七年七月、臨時召集により福井銀行栗田部支店勤務中、浜松市追分中部七二部隊尻尾隊高射砲隊に入隊。通信教育を受け毎日厳しい訓練でした。

昭和十七年十二月、同年兵もビルマ行と満州行に分かれ、私は満州行の命を受け一泊、家に帰る事が許され、浜松駅から列車で六時間かかり武生駅に到着しました。南越線が大雪のため不通なので家まで歩いて帰りました。翌日浜松の部隊へ戻りました。

十二月十九日浜松を出発、軍用列車で下関駅へ着きました。釜山へ連絡船で。玄界灘が荒れ船酔いで横に転がり吐く者が多く、生きた心地がしませんでした。約十時間余りの船旅でした。

釜山に到着、朝鮮鉄道で丸一日余り平凡な土地を眺めながら満州国の鉄道になり、広軌でゆったりとした感じになり、奉天駅で乗り換え、北満の中心ハルピン市に到着しました。大きな寺院があり、白系ロシア人も多く立派な都市でした。三七七四部隊司令部が元イタリア領事館跡に白い建物で、横にはハルピン神社、中央寺院がありました。満州第六一六部隊と三七七四部隊が同じ部隊長でしたので、六一六部隊は市郊外の石子溝にあり、木造の半地下兵舎で氷点下三〇度もあり防寒具が支給され、班は石炭暖房だった。

通信教育を受け一年半ぐらいで公主嶺に部隊が移動しました。赤レンガ建の立派な兵舎でした。高射砲隊なので航空隊との関係があり、飛行機から吹流して飛んでもらい、高射砲から実弾を射つ演習が何回かありましたが、飛行機も南方へ送られ少なくなりました。

一年後、新京(長春)に三七七四部隊、六一六部隊が移動しました。この戦争は長引くと思ひ予

備役下士官候補を志願して主計の勉強をしました。本部事務室勤務になり主計の教育を受け勉強中、八月九日、突如ソ連軍の侵入により「新京を死守すべし」という命令によりわずか一個師団新京を守る事になり、私達の部隊も戦時の編成となって師団に配属となり、三日二夜かかって陣地を作り、玉砕を決意してソ連軍の航空機、機械化部隊の攻撃に備えました。骨を満州に埋める覚悟であった。八月十五日、夢にも思わなかった終戦。「ソ連軍の指揮に入るべし」の軍命令によって全部隊が抑留となり、六一六部隊は公主嶺で武装解除。兵舎に穴を掘り小銃、軍刀、その他の武器は埋設し、ソ連軍の指揮で関東軍の物資資材をソ連領内に送り込む作業が毎日続いた。

昭和二十年十月二十日黒河に到着。船で対岸のソ連領のブラゴエシチェンスクに上陸した。大型貨車で一貨車五十人ぐらいで千人ぐらい乗った。車の中の炊事は大釜が幾つも置いてあって、コウリャン飯で、朝夕の二食が飯盒の蓋に一杯ずつだ

ったので空腹を我慢した。貨車の中の大小便には本当に苦労した。戸を二十センチぐらい開けて用を足した。各自持っていた米は命令が出ないと食べられませんでした。列車の運行が不規則だったからです。列車が止った時には他の貨車に積んであるバラ積みみの岩塩を盗み、粉にして保管した。塩分が足らなくて困ったからです。

中央アジア・ウズベキスタンの首都タシケントに到着。それから六時間、山頂炭坑の町アングレンに到着し、収容所は元ロシアの囚人が入っていた古い建物でした。丸太囲み、四方望楼あり、鉄線で張り巡らし、監視兵が二十四時間見張っていた。建物は木造半地下で二段寝台板張り。食糧の配給は一日一人当り黒パン三〇グラム、高粱、野菜、骨入りスープでした。作業は陸の土運び、建物工事、一輪車で石炭を貨車に積む等、色々な雑役をしましたが、空腹になり、昼食後タンポポやアカザの野草をつんで帰り、飯盒で煮て食べました。二カ月ぐらい過ぎて第九炭坑作業に変わ

きました。二十人ほど集まり、楽しい「ひととき」を過ごす事が出来ました。坑内のトロッコ押しは二人ずつ三区間押ししましたが、線路の継ぎ目が悪くて脱線する事が多くて大変でした。ノルマがあり厳しい目にあいました。一生懸命作業をしても落盤で坑道が不通になったり、その他の事故の場合にはトン数が出ないためにノルマが上がりませんでした。

エレベーターを作るために穴掘りもしました。直径六メートルの穴です。鉄の桶の中へ土を入れて機械で上げ下ろしをしたのです。穴の中の作業はスコップやつるはしで手作業でした。狭いので五、六人でしました。いっばいになったら吊り上げて、空の鉄の桶が下つてくるとまた土や石を中に入れる。円形の型のコンクリートを穴の中に入れてボルトで締めると円形のコンクリートが出来る。百メートル余り掘り下げて縦穴を作った。苛酷な労働でした。ようやく簡単なエレベーターが出来上がりましたので便利になりました。それか

ました。作業編成は採炭、二十四時間稼働するので三区分になる。一番は八時より十六時まで。二番は十六時より二十四時まで、三番は翌日八時まで。一回に約百五十人入坑する。十日ずつで交替でした。

半年ぐらいは入浴は全くなく、シラミやノミがわき、発疹チフスが流行し煮沸消毒をしました。予防注射も二回しました。日本人向きの鉄板風呂も作ってくれたので入浴する事が出来ましたが石鹸はありませんでした。坑内の入口はエレベーターもなく、鉄製のランプで傾坑百五十メートル歩いて入りました。

坑内は古く、一トン入りのトロッコに石炭を積み、毎日八時間、厳しい監督がダワイダワイと言って炭坑の作業が続いた。作業量にはすべてノルマがあり、日本人の未経験者には苛酷なものでした。炭坑作業は給料を二回もらいました。食べる黒パンも以前よりは少し大きくなりました。

日曜日には福井県人会をアングレンの山頂で開らは坑内の仕事は鉄板のコンベアがあり、一トン入りのトロッコに石炭が入る仕組みになっているのでスコップでコンベアに入れました。層が薄いので横に機械を移して取った後は廃坑になります。狭苦しくて大変な仕事でした。坑内の一番奥にはコンプレッサがあり、石炭を掘るために一メートルぐらいのねじ穴を六本ぐらい掘り、ロシア人の火薬取扱人が来て火薬を穴に詰め、導火線と粘土を長い棒で詰めて爆破した。一回に五く六トンの石炭が出ますので皆、横穴に入ります。その爆破した石炭を数人でトロッコに積んで運びます。この様な事を繰り返していましたが、週一回の休日には碁や将棋をして遊びました。碁や将棋は皆の手で作ったものですが、これが唯一の楽しみでした。

日本新聞も時々読みました。共産主義の教育を厳しく叩き込まれ大変辛い思いをしました。日本に帰れなくなつては大変だと、皆と一緒に調子を合わせるより外ありませんでした。炭坑へ行って

いる間に私物検査があり、時計や万年筆等は全部盗られてしまいました。

昭和二十三年十月にタシケントに移動になり建設作業や雑役をさせられました。十一月には帰還の命令があり、皆が喜びました。タシケント駅より列車に乗り、炊事車両があり、時々駅に着いた時には食事を受け取り、故郷の思い出を語りながら食べました。三年間の厳しい抑留に耐えて、幸運に恵まれ体力と生命力があつたことに尽きると思う。途中ハバロフスクとバイカル湖に列車が止まりました。ナホトカ駅で止まり、そこで降り、日本人の収容所に入り船が来るのを待っていました。集結地なので日本人がいっぱいでした。

二十三年十二月三日、朝嵐丸(二五、〇〇〇トン)がナホトカ港に接岸したので、私共一人ずつが点呼を受けながら二千人の同僚と共に乗船し、十二月四日舞鶴港に上陸し、生きて日本の土を踏む事が出来た喜びをひしひしと感じました。

【執筆者の紹介】

大正九年七月二十五日

福井県に生まれる

福井県南中山尋常高等

小学校卒業

昭和十七年七月

臨時召集、浜松追分中

部七二部隊に入隊

昭和十七年十二月

満州ハルピン三七七四

部隊、六一六部隊に派

遣される

昭和十九年

公主嶺に移動する

昭和二十年

新京に移動

昭和二十年八月十五日

終戦

昭和二十年十月二十日

ソ連領に抑留

昭和二十三年十二月四日

朝嵐丸にて舞鶴港に上

陸

(福井県 佐々木 清左夫)